

市内遺跡出土品速報展

～諏訪木遺跡（上之地内）・三ヶ尻古墳群（三ヶ尻地内）～

会期：平成28年2月1日（月）～平成28年5月20日（金）

会場：熊谷市立江南文化財センター（ホール展示ケース）

発掘現場から

文化力
POWER OF CULTURE

1 はじめに

熊谷市教育委員会では、平成27年4月から7月にかけて、市内上之地内に所在する諏訪木遺跡において、寺院敷地内での墓地造成及び道路新設に伴う記録保存のための発掘調査を実施しました。

その際に、弥生時代中期後半（今から約2,200年前）と考えられる土坑から、合計4個体の大きささまざまな壺が出土しました。これらの壺はいずれもつぶれた状態で検出されていたが、復元することで、当時の様相を再現することができました。

また、同教育委員会では同年8月～11月にかけて、市内三ヶ尻地内に所在する三ヶ尻古墳群においても、個人住宅建設に伴う記録保存のための発掘調査を実施しました。

この発掘においては、古墳時代後期（今から約1,400年前）の古墳の周溝が2条と、周溝に隣接した土坑から埴輪棺が出土しました。埴輪棺は、埼玉県では十数例程度確認されていますが、熊谷市では初の出土となります。

これらの出土品は、当時の人々の生活していた様子をうかがい知るうえで貴重な遺物となります。そのことから江南文化財センターでは、これらをいち早く皆様に見ていただきたく、速報展を企画いたしました。

2 諏訪木遺跡と発掘調査の成果について

諏訪木遺跡は、本市東側に位置する妻沼低地の自然堤防上に広がる、縄文から江戸時代に至るまでの複合遺跡です。本遺跡の性格を知るうえでの発見としては、古墳時代後期から平安時代にかけて行われた河川での祭祀跡や、平安時代の官衙（役所等）的集落跡の発見です。

今回の調査では、弥生時代中期の竪穴住居跡、古墳時代中期～後期の溝跡、古代～中世と考えられる掘建柱建物跡、中世の堀跡、水田跡、井戸跡などが発見されました。

展示品にはありませんが、今回の発掘調

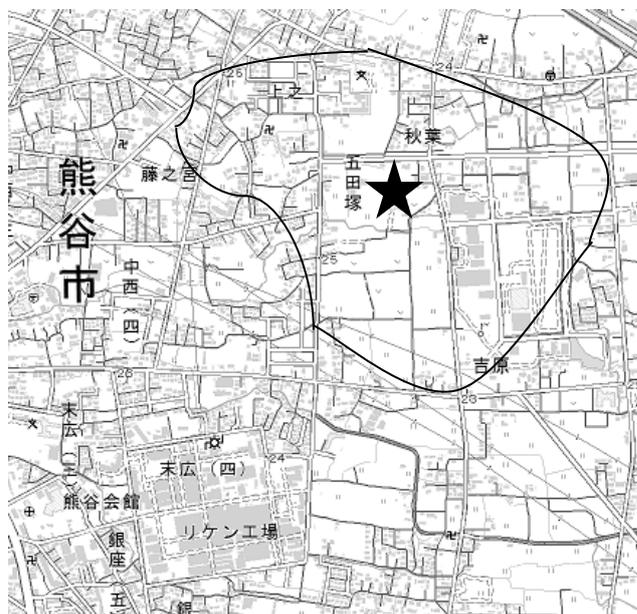


図1 諏訪木遺跡発掘箇所位置と遺跡範囲

査では、弥生時代の住居跡から管玉や勾玉が出土し、古墳時代後期から平安時代初期と思われる溝跡からは、多くの土器が出土しています。また、その溝跡を中世以降に堀跡として転用して利用したと考えられ、堀の底からは、五輪塔や硯、板碑、軒瓦など隣接する寺院の過去の様相を表す遺物も多数出土しました。

本遺跡においては、弥生時代の遺構や遺物はわずかでしたが、今回展示となった弥生時代の壺は当時の人々の生活の痕跡を知るうえで、貴重な発見でした。

3 諏訪木遺跡の展示品（弥生土器）について

今回の展示している「弥生時代壺」は弥生時代の中期後半の比較的早い時期のものと考えられ、およそ2, 200年前と推測できます。これらの壺は外面の文様などから、現在の長野県の中部高原地域の影響を濃く受けていると考えられます。

(1) ①弥生時代壺

この壺は高さおよそ30cmで、胴部に「重三角文」と呼ばれる三角形の文様が特徴で、その三角形を「押し引き列点文」という点線のような文様で描いており、さらに胴部から口縁部に向かって、その列点文で外周を4重に渡って描いています。残念ながら口縁部付近は欠損しているため、詳細は不明ですが、ラッパ状に広がった形になっていただろうと思われる。

(2) ②弥生土器壺

こちらの壺は高さ約36cmと、①とは異なり、やや胴回りがずんぐりしており、異なった形態を見せています。文様のすべてが沈線で描かれており、①での点線のような文様とは異なります。胴部外面の文様は、胴部上端に描かれており「変形工字文」と呼ばれます。これはカタカナの「工」の文様が特徴となっています。また、胴部下端には沈線で描かれた「重三角文」が描かれています。

これらの弥生土器はいずれもうっすらと縄文痕も確認でき、縄文時代からの伝統を引き継い



図2 弥生土器壺検出状況

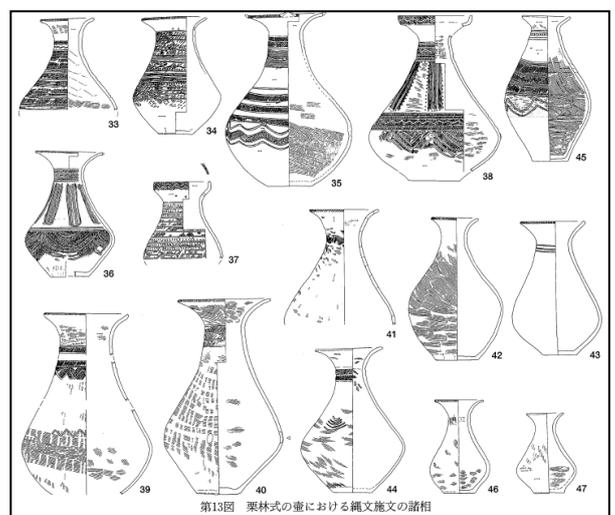


図3 長野県における栗林式土器

でいると考えられる装飾的な壺です。隣接する前中西遺跡などでもこのような文様をした種類の土器が確認されており、墓域に関する遺構から確認できた埋葬形態も長野地域の様式に類似性が認められることから、当時上之地域において、長野地域との間に深いつながりがあったものと考えられます。

4 三ヶ尻古墳群と発掘調査の成果について

三ヶ尻古墳群は、本市西側に位置する櫛引台地の東端付近、観音山の北側周辺に広がる、古墳時代後期に築造された古墳群が所在する遺跡です。この古墳群ではこれまでに多数の古墳が発見され、これまでに62基の古墳が確認されています。過去の調査により、前方後円墳や円墳があることが分かり、その大部分が円墳で、前方後円墳はわずかに2基のみでした。大半は、削平や半壊などで、完全に残っておらず、ほぼ完存しているのは、4基ほどとなります。出土した遺物は、土器類や埴輪や副葬品と考えられる耳環、直刀、刀装具、勾玉などです。

今回の調査では、古墳の周溝と推測できる溝跡が2条検出したことから、新規に古墳が2基見つかったこととなります。残念ながら墳丘の確認はできませんでしたが、周溝からは円筒埴輪の破片や、葺石と言われる、墳丘に葺いた川原石が検出されたことから、古墳があったことはまず間違いのないと思われます。よって、合計で64基の古墳が三ヶ尻古墳群では確認されたこととなります。

また、2条の周溝の間には、古墳が造られた時代より前の縄文時代中期

(今から約4,000年前)の住居跡も検出されています。周溝によって、一部削られていましたが、多数の縄文土器が出土し、住居の中央部に位置するだろろ箇所には「炉跡」が確認できました。三ヶ尻古墳群に隣接する三ヶ尻遺跡でも、同時代の住居跡がいくらか確認されていることから、この台地付近に縄文時代の集落が展開していた可能と考えられます。



図4 三ヶ尻古墳群発掘箇所位置と遺跡範囲



図5 三ヶ尻古墳群 発掘作業風景

今回はこれらの中でも、「埴輪棺」を展示しております。これは、古墳の周溝に隣接した土坑内から出土したもので、熊谷市では初めて出土例であることから、貴重な発見です。

3 三ヶ尻古墳群の展示品（埴輪棺）について

この埴輪棺とはそもそも埴輪で作られた棺を指し、古墳に立てる埴輪を用いた棺と、はじめから棺として作られたものがあります。埴輪棺とする場合には、通常2基の円筒埴輪を互いに合わせた状態で横に寝かせ、遺体、あるいは遺骨を納めた後、口や底、すかし孔などを埴輪片や石でふさぎます。

展示されている埴輪棺は、典型的な円筒埴輪の様相を呈していて、埴輪は、転用した埴輪を利用しているものと思われる、底や、すかし孔などは割れた円筒埴輪の



図6 埴輪棺 出土状況

破片でふさいでありました。また、利用した円筒埴輪は双方とも欠損や、ヒビなどなく完形で、すかし孔や口などをふさぐ埴輪片も当時設置した箇所のまま配置してあることから、埋葬した当時のままの状態で見ることができました。

内部には被葬者が納められていたと考えられ、内部の確認も行いましたが、残念ながら何も確認できませんでした。遺骨は長い年月とともに、土に還ったものと思われる。

また、埋葬は、埴輪の大きさから考えて、子供の遺骨を埋葬したものと判断でき、さらには、古墳の周溝に寄り添う形で埋葬されていることから、古墳被葬者の近親者がこの埴輪棺に埋葬されたことが想像できます。

平成28年2月1日発行

編集・発行：熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）